

平成27年度「ふくしまの未来を担う高校生海外研修支援事業」実施報告書

学校法人若松第一高等学校

実施期間・参加人数・滞在都市・現地交流校について

実施期間：平成28年3月14日～3月23日(10日間)

参加人数：1～2年生16名

滞在都市：オーストラリア ブリスベン

交流高校：St Eugene College



実施概要について

3月14～15日 移動、ホストファミリー宅へ

3月16日 ホスト校での学習（現地小学生との交流、現地高校生とバスケットボールの試合、英語での自己紹介、現地通貨の授業、ホスト校内をめぐるツアー）

3月17日 ホスト校での学習（アボリジニ文化について、オーストラリアの地理について、現地校のスポーツデーに参加し、サッカー、バレーボールなどの試合を行う）

3月18日 ホスト校での学習（環境問題、エネルギー問題講演、現地高校生の数学・ビジネス・音楽の授業に参加、現地小学生のクラスで折り紙を教える実習 職業の授業）

3月19～20日 土・日曜日 ホストファミリーとアクティビティ

3月21日 ホスト校での学習（福島のプレゼンテーション、ホストファミリーへ英文の手紙を書く）さよならパーティでは、生徒が作った日本料理を参加者にふるまつた。

3月22日 帰国



福島の現状発信や現地におけるエネルギー学習について

○エネルギー学習

クイーンズランド大学グローバルチェンジ研究所のクレイグ・フルーム先生にお越しいただき、オーストラリアにおけるエネルギー事情や、これから展望について講演をしていただきました。オーストラリアは豊富なエネルギー資源を持ち、特に石炭の産出が多いので、電力の6割を石炭火力発電でまかなっているとのことでした。今後はその比率を自然エネルギーに置き換えるという目標を示し、全世界の太陽光エネルギー、風力、波力のエネルギーが、人類が消費しているエネルギーと比べても膨大な量であること、オーストラリアは雨が少なく太陽光が豊富な上に、人口が集中しているということで太陽光発電に適しているという話をされて講演を終えました。質疑応答では生徒から「家にソーラーパネルを設置するとどれくらいお金を節約できますか？」という質問がされ、クレイグ先生は「昼は太陽光を使っても夜は発電できませんから、夜にたくさん電力会社の電気を使っては結局は節約できないので使い方によりますね。例えば昼に発電した電気をうまく貯めることができればとても便利です。私の大学では電気ストレージに

ついて研究をしています」とお答えいただきました。逆にクレイグ先生から「日本のコンセントは何ボルトですか?」という質問がされ、「100ボルトです」とお答えすると、「砂漠地帯から都市部に太陽光で発電した電気を送ったり、昼の地域から夜の地域に電気を送ったりできればとても便利です。ネックなのは、同じ国の中であっても、ボルト数が違っていたりすることです。日本の規格に統一すれば、アメリカ、アジア、ヨーロッパを結ぶ世界的なスマートグリットができるかもしれません」という壮大な夢も語っていただきました。

○福島の現状発信について

1回目：現地の高校1年・2年生の日本語を履修しているオーストラリア人生徒30名に向けて、生徒による15分の英語のプレゼンテーションと、本校の紹介ビデオ5分、会津若松市観光協会が作成した英語の観光誘致ビデオ5分を観ていただき、質疑応答を行いました。オーストラリアからの震災復興支援への感謝を伝えるなど、現地生徒にも興味を持ってもらえる内容だったと思います。本校紹介ビデオでは、本校自動車部が取り組んでいる電動カート、エコカーの紹介がとても印象的だったので、「エコカーのレースに出場していますか?」と質問されました。「大学でも英語の勉強を続けますか?」「オーストラリアの食事はどうでしたか?」など、高校生同士の交流ならではの質問や、ちょうど前日がブリスベンの市長選挙だったので、「日本では何歳から投票できますか?」との質問も寄せられました。また、日本で使っている英語の教科書の中のオーストラリア関連単元を紹介すると、皆、興味津々に見入っていました。

2回目：ホストファミリーやホスト校関係者約70名が参加したさよならパーティでも生徒によるプレゼンテーションを行いました。質疑応答では、「原発から会津はどれくらい離れていますか?」「オーストラリアの新聞では原発問題は深刻だと報道されていますが、本当に大丈夫なのでですか?」などの質問が寄せられました。福島県が発行している「ふくしま復興のあゆみ」英語版の資料を活用し、「除染が進み、空間線量が以前より減っていること」「他国の都市と比べても福島県の線量が低いこと」「県内のあらゆる場所、あらゆる生産物についてモニタリングされていること」を伝え、「福島の農産物や魚もとても安全です。どうぞ日本の食べ物も安心して味わって下さい」というセリフでプレゼンテーションを終えました。

実施後の成果について



ホスト校では現地校生に混じって同じ授業を受けることができました。特に数学の授業では、言葉を越えて理解し合えたことで、とても自信になったようでした。各生徒には現地生徒のバディが付き、昼食と一緒に食べる等、休み時間も常に英語を使う環境で過ごせました。

生徒たちは英語が通じる喜びや、コミュニケーションの楽しさを存分に味わっていたようで、「もっと長く研修したい」「英語がペラペラになるまで残りたい」など、とても前向きな意見が寄せられました。すでに再び海外研修に行くことを決めた生徒は、生活の中でどのような英語表現が必要か、今回学んだことが次回にも生かせると、とても意欲に溢っていました。帰国後もメールやSNSでの交流は続いている、高校生が福島で生き生きと生活している姿を、リアルタイムで海外に伝えていることは、福島の現状を海外に発信する一番の方法だとも思いました。一人一人が福島の観光大使として活躍してくれているように感じます。